

明・清時代北京における娯楽について

史 静

はじめに

本稿の研究目的は、明・清時代北京における娯楽について明らかにすることである。娯楽に関する歴史的研究は、曾我部静雄氏の『開封と杭州』と佐藤武敏氏の『長安』でしか行われていない。『開封と杭州』は都市の年中行事を季節ごとに挙げられているのである。行事の中に娯楽も取り上げられている。『長安』は都市研究を中心としているので、都市の中で娯楽が取り上げられている。北京城の歴史を遡ると、明・清時代に築かれた北京城は現在首都となっている北京に強く影響を与えているが、北京の娯楽を細かく分類した研究はまだ十分なされていない。それを明らかにすることは重要な研究課題であると考えられる。

1、北京の概要

北京は紀元前 1 千年前頃から人々が住んでいた。歴史上にはじめて姿をあらわしたころの北京は、「薊」と呼ばれていた(1)。紀元前 3、4 世紀にかけて「薊」は燕国の都であった(2)。紀元前 221 年から 10 世紀のはじめまで、「薊」は北方における商業の中心、軍事上の要衝として栄えた。

10 世紀のはじめ、東北地方の遊牧民族である契丹が、北京に攻め込み、遼の国を建てて、ここを第二の都(3)とし、中原を攻める拠点とした。

12 世紀のはじめになると、東北地方に住んでいた遊牧民族の女真族が金国をたてて、遼国を滅ぼし、黄河流域を侵した。そうして、1153 年北京を正式の都と定めて、「中都」と名づけ、当時都を杭州においていた漢民族の南宋とあい対峙した。

元朝を建てた蒙古民族は、1263 年に都を北京に移して、「大都」と名づけた。大都是、金の旧都の東北郊外を中心に築かれた(4)。1275 年ヴェネチアのマルコ・ポーロが「大都」にやってきたが、彼の口述記録『東方見聞録』では大都のことを帝王の都と呼んでいる。

漢民族の建てた明朝は 1420 年に都を北京に定めた。元の大都を基礎に北京城が造られた。明の時代に、北京は 2 回にわたって改造され(5)、16 世紀になると、人口 70 万人の都市に発展した(6)。

1644 年に満州族の建てた清朝もまた北京に都をおき、都城も明朝のままであった(7)。

北京は華北大平原の北端に位置し、潮白河、永定河が形成した扇状地にあり、北京湾と呼ばれるポケット状の小平野をなしており、東、西、北を山に囲まれている。西部の山地は総称して「西山」といい、太行山脈に属している。北部と東北部の山地は全て「軍都山」と称し、燕山山脈に属している。天然の峡谷沿いに東北へ向かえば遼河平原にはいり、西北へ向かえば蒙古平原に達するところである。

北京の主な河川は永定河、潮白河、北運河、拒馬河などで、その多くは西北部の山地に

水源を発し、山を突き抜けて東南の平原地域へ向かって流れ、最後はそれぞれ渤海に流れ込んでいる。

金国が築いた「中都」は今の北京の西南方に位置し、周囲 37 余里の正方形を成している。城の中部に長方形の宮城が作られた。宮殿の豪華さについては、「宮殿はみな黄金、五彩をもって飾り、一殿を成すに億の富をもつ」と『二十二史劄記』に記されている(8)。1211 年、金国がモンゴル軍との戦いに負け、中都是完成後 70 年を経て戦火で焼失した。それから 40 年後の 1263 年にチンギスハンの孫フビライハンが金の中都の東北郊外を中心に「大都」を築いた。以前はその一帯には湖が連なっていたが、金国の支配者が湖の中に人工の島を造り、楼閣を建てて、離宮を造った。中都是焼失したが、そこだけが戦火から免れて残った。元の支配者はそこを中心として都城を造った。中都の生活用水は蓮花池から供給していたが、漕運(9)の問題も存在していて、水が不足しているため、新しい水源を開発することを試みたが、結局金国が滅ぼされるまで解決できなかった。元は中都の東北郊外にある高粱河水を生活用水にすることを考え、都城を中都の東北郊外に建てた。大都是周囲 28600m、南北がやや長く、長方形をなしている。これが今日の北京内城の前身である(10)。

1368 年、明は元を攻めた後に防衛の目的で大都城の北部を縮小し、南牆を更に 2 里程南へ移して明の北京城とした。清は明の北京城をほぼそのまま受け継いだ(金、元、明と清の都城の位置関係は図 1 を参照されたい)。明・清時代の北京は外城、内城、皇城、紫禁城の 4 重の構造になっていた。内城の全周は 20km、外城の出来上がった部分の長さは 14km である。城門は内城に 9、外城に 7、皇城に 4、全部で 20 あった。明代、これらの城門はそれぞれ役割分担が決まっていた。表 1 に明代北京城の門とそれぞれの機能についてまとめた(11)。

表 1、明代北京城の門とその機能

門の名称	機能
正陽門	北京の表玄関で、皇帝や皇族たちが天壇に参拝に行ったり、地方に視察に出かけたり、郊外に遊びに行ったりする時に使う、いわば「御門」であった。
崇文門	南郊外の酒どころから酒を運び込む門であった。
朝陽門	大運河を使って南方から運ばれてきた米を運び込む門であった。
東直門	木材を運び込む門であった。
安定門	市民の糞尿を郊外の農村に運び出す門であった。
徳勝門	軍用の門
西直門	西郊外の玉泉山から皇室用の飲料水を運び込む門であった。
阜成門	西郊外の門頭溝炭鉱から石炭を運び込む門であった。
宣武門	刑場に向かう死刑囚が通る門であった。

紫禁城を中心として南北を貫く中軸線の周辺に祭壇、寺院、庭園、王族や高官の屋敷が建ち並び、庶民の住む胡同(横町)が縦横に走っていた。

明の北京城は内城に坊が 33 あり(12)、明の中期に外城が築造されたので、内城の 29 の坊と外城の 7 の坊を合わせて 36 の坊に区画された(13)。

清の北京城は内城を八旗で分け(14)、外城は東城・南城・中城・北城・西城に分けて都市管理をしていた(15)。

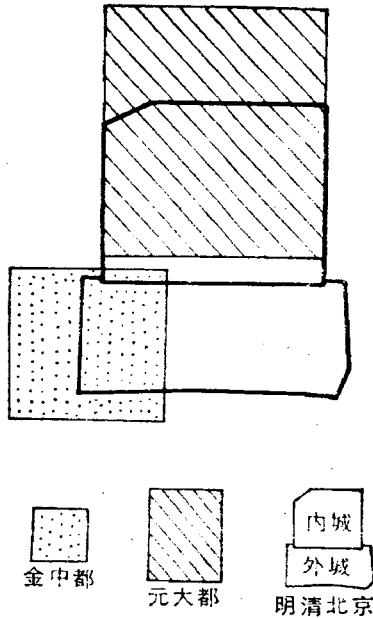


図1 金、元、明・清の位置関係図
(侯仁之『歴史地理学的理論と実践』上海人民出版社 1979年より)

表2 金・元・明・清時代の北京の人口

時代	戸数 (戸)	人口 (人)
金代①	225,592	不明
元代②	147,590	401,350
明代③		
(弘暦 4 年) 1491 年	100,518	669,033
(万暦 6 年) 1578 年	101,134	706,860
清代④		
(順治 18 年) 1661 年	不明	104,392
(康槎 24 年) 1685 年	不明	135,131
(雍正 2 年) 1724 年	不明	158,133
(雍正 12 年) 1734 年	不明	145,452

(乾隆 37 年) 1772 年	不明	196,065
(光緒 8 年) 1882 年	不明	386,634

※ ①『金史・地理志』から引用②『元史・地理志』から引用③『明史・地理志』から引用
④『光緒順天府志』から引用

表 3 清代北京内城の戸数 (1910) 年 表 4 清代北京外城の戸数 (1910) 年

区域	正戸(戸)	附戸(戸)
内中一区	1,771	1,779
内中二区	1,224	1,336
内中三区	1,014	1,237
内左一区	3,073	3,029
内左二区	4,139	3,256
内左三区	3,495	3,101
内左四区	5,010	5,116
内左五区	3,525	4,089
内右一区	3,781	3,263
内右二区	4,855	3,930
内右三区	3,483	3,376
内右四区	4,181	4,062
内右五区	3,319	3,364
合計	42,870	40,938

区域	正戸(戸)	附戸(戸)
外左一区	3,476	2,797
外左二区	2,707	2,908
外左三区	2,131	3,327
外左四区	973	1,067
外左五区	2,555	4,687
外右一区	3,330	2,814
外右二区	3,552	2,852
外右三区	2,244	2,431
外右四区	2,646	2,784
外右五区	2,079	3,440
合計	25,693	29,107

※正戸とは戸籍を一定して移り住まないもの。本業あるもの。

附戸とは雇われてこの地に移住してきたもので、本籍は他の場所であるもの。

表 3、4 は『北京市誌稿』第 2 卷『民政志』から引用

2、金、元時代北京の娯楽

女真族は松花江一帯に住んでいるツングース系民族であり、周辺の部落を統一し、東北部で金の国を建てた。次第に遼と北宋を滅ぼし、金の勢力が強まった。占領地域の拡大とともに、女真族は漢民族との交流が多くなり、漢民族の統治制度や文化、習慣などを取り入れた。「院本」といった演劇が金代で形成され、貴族から庶民まで親しまれて、元代まで続いた(16)。茶楼で双六のような賭博がよく見られる(17)、それは庶民の娯楽であると考えられる。北京の立地条件によって年に 1 回しか狩猟へ行けず、狩猟は騎馬民族の本業から国王や貴族の娯楽となった(18)。

モンゴル族は遊牧民族であり、毎年春になると、支配者たちは狩猟に出かける習慣がある。大都内外の園林名勝や奇花異草はいずれも支配階級のものであり、花見をしながらお酒を飲むのは貴族たちだけの娯楽であった(19)。元の時代、科挙制度が中止になったので、受験勉強をしていたエリート達の中には生活の為に小説や芝居の台本を書く者が出てきた。知識人が小説を書くので質の高い作品が生まれた。「元曲」といった雑劇が生まれて(20)、それを観るのは貴族から庶民までの広汎な階層の人々の娯楽であった。

3、明代北京の娯楽

元朝をモンゴル高原に退けて、漢民族による中国統一を達成した明朝では、朱子学は官学となり、永楽帝の命によって『四書大全』『五経大全』『性理大全』などを編纂する一方、陽明学も成立した。明末から清初にかけては、朱子学や陽明学に対して、確実な文献に典拠を求めて儒学の古典を究明しようとする考証学が盛んとなり、考証学の学者が多く出てきた。その影響で実用や実践を重んじる実学が盛んとなり、明末には多くの技術関係書が刊行された。

明代の娯楽について以下見てみよう。当時崑劇が流行り出した。崑劇は、明代天啓年間から清代康熙年間（17世紀初～18世紀初）の100数年間で最も盛んとなったが、その後、京劇等の劇に押され徐々に衰退していった。崑劇は格調高い芝居として尊重されると同時に、他の地方劇の形成に大きな影響を与え、「戯曲之祖」「母劇」などの尊称がある。崑劇が北京に伝わったのは明代万暦年間から始まるが、19世紀半ばに至るまで長い間に、崑劇は主に宮廷や貴族、文人階級の間で愛好されてきた(21)。しかし、後に清朝の政治的基盤が揺らぎ始めると、芝居上演が禁じられた時もあった。崑劇以外に、書画や骨董品の收藏や、鬪鷄も上流階層的な娯楽であった(22)。

全階層的な娯楽としては、鬪蟋、虫遊びと花火があった。鬪蟋は、唐代既に存在していた。最初は虫の音を楽しむために蟋蟀を飼い始めたが、いつかオス同士を一緒にしておくと喧嘩になると気づき、その好戦性を利用して鬪蟋を考え出した。勝敗を競ううちにお金を賭けるようになり、人々は熱心に虫の生態を観察し、強い虫を育てる方法を研究するようになった。明代に入ると、鬪蟋ブームになり、採集方法や虫の見分け方を書いたマニュアル本も出版され、蟋蟀の人工繁殖も試みられた(23)。しかし、このブームの背景には、賭博が絡んでいたことは無視できない。

明代は庶民文化が栄えた時代であった。庶民の娯楽としては、スケート(24)、雑技を見ること(25)、女の人がやる抓子兒と言う遊びがあった(26)。雑技の歴史は古く、周代（約紀元前1050年～紀元前771年）に芽生え、漢代（紀元前206～220年）に形成された。明代には多くの人が天橋（図2参照）付近で白い円を書いて自分の持ち場とし、そこで色々な芸をして生活費を稼いでいた。

虫遊び(27)、石蹴り(28)、ごっこ遊びと泥銭遊びが子どもの遊びである(29)。以上の遊

びは全部庭や空地で行うものである、家の中で行う遊びには抓貝石があるが、やはり明代の子どもの遊びの基本は、外での遊びであったと考えられる。

明末、宦官により政治の腐敗が深刻になっていき、北方のモンゴル族も度々明に侵入し、豊臣秀吉の朝鮮出兵に対して、明は朝鮮支援に莫大な費用を使って財政が悪化したばかりでなく、宮廷内の政争と農民反乱によって次第に衰退していった。李自成が率いた農民軍が明を滅亡させ、新しい王朝を建立し、皇帝になろうとしたが、呉三桂が清軍側に寝返って、清軍を北京に引き入れたことで、明に代わって清国が建立された。

4、清代北京の娯楽

李自成の乱によって明が滅んだ。明の将軍であった呉三桂が清軍を北京に引き入れたために、満洲族による中国支配が開始された。康熙帝が即位後に三藩の乱を鎮圧し、鄭克塽の降伏を受け入れて台湾を併合して、清の中国支配を最終的に確立した。康熙帝・雍正帝・乾隆帝の3代に清は最盛期を迎えた。この時代には文化事業も盛んで、特に康熙帝の『康熙字典』、雍正帝の『古今圖書集成』、乾隆帝の『四庫全書』の編纂は有名である。一方、満洲族の髪型である辮髪を漢族にも強制し、文字の獄や禁書の制定を繰り返して異民族支配に反抗する人々を弾圧するなどの強圧政策もあった。

乾隆帝の60年に及ぶ治世が終わりに近づくと、乾隆帝の奢侈と10度に及ぶ大遠征の結果残された財政赤字が拡大し、官僚の腐敗も進んで清の繁栄にも陰りが見えはじめた。1840年のアヘン戦争、1856年のアロー戦争と同時期に国内でも太平天国の乱が起こり、清の支配は危機に瀕した。動乱の末に即位した同治帝の母西太后が政権を握ると、曾国藩・李鴻章ら太平天国の鎮圧に活躍した漢人官僚が力を得て、王朝の根幹の制度を維持したままヨーロッパの技術を導入する洋務運動を開始した。しかし、後に1885年の清仏戦争、1895年の日清戦争と同時に国内に起こった義和団の乱によって中国の半植民地化がますます進んだ。1911年に辛亥革命により清は完全に内部崩壊を迎え、翌1912年に中華民国が南京に樹立したことによって、清は完全に滅亡した。

清代における娯楽について以下見てみよう。元の時代、「元曲」と呼ばれた演劇があり、明の万暦年間から清の康熙年間（1661年～1722年）におよぶ200年間で、「崑曲」の黄金時代となって全国に流行した。清の中期に入り、安徽省にいた4つの劇団が次々に北京に進出し、地方の様々な要素を吸収しながら京劇という新しい形を生み出した。従って京劇は清代に形成されてものであり、最も洗練された演劇と言われている。元曲や崑劇に比べると、京劇は通俗的で娯楽性にとんだ芝居といえる。本来の京劇は、緞帳や幕はなく、舞台装置は机と椅子くらいで非常にシンプルなつくりになっており、また音楽も、旋律とリズムを刻む楽器がある程度で、非常に小規模の劇団しかなかった。劇団の役者は身分の低いものが演じていた。しかし、次第に京劇が貴族に人気が出たために、貴族自らがノーギャラもしくはお金を払ってまで舞台上がって演じるようになった。つまり票友と言われ

る人々が出てきていた。そして、京劇は大劇場で上演されるようにもなり、舞台装置も派手になっていった。梨園へ劇を聴きに行くことと、自分が舞台上がって歌うことが貴族の娯楽になり、梨園は大柵欄や肉市に集中していることが明らかになった(30)。

八大胡同は北京城の南に分布している下町のことである。清代から遊郭が集まっている場所として有名であった。八大胡同とは八つの胡同だけを指すわけではなくこの辺一帯を総称して八大胡同と呼ばれている。この八つは当時一流の遊郭が多く、また遊女の教養的ランクが高かったので一番名声があったが、八つ以外にもこの辺一帯には多くの遊郭が建ち並んでいた。官僚が遊女にはまり、職務を怠ることや公金を横領するまでに遊女にお金を費やした人もいたので、1891年に遊郭禁止令が出された。一見官僚たちの女遊びの風習が抑えられたように見えるが、宴の席に遊女の代わりに男稚児芸者が一緒に飲む役になっていた。男色にはまる官僚や知識文化人が次第に増えていた。清末まで遊女や男稚児芸者を含む遊郭を取り締まる命令が何回も出されたが、禁止令が出される度に、遊郭が一時的に閉るが、暫くするとまた店が開き、このような繰り返しであった。1949年、中華人民共和国の建国と共に政府がこの一帯の店は閉まり、300年以上の遊郭の歴史は閉じられた(31)。

明代と変わらず清代にも闘蟋が全階層的な娯楽になっていた。宮廷内では毎年秋に、重陽節(旧暦の9月9日)から1ヶ月あまりの間、北京西郊の樞和園で皇族や据官たちが集まって闘蟋が行われた。街角で蟋蟀を闘わせることもあるし、小屋で闘蟋が行われることもあった。闘蟋ブームが長年続いており、皇族でも庶民でも蟋蟀に力を注いでいた。しかし、これは虫好きから来るのではなく賭博が目的であった(32)。

闘蟋以外にスケートも貴族から庶民及び子どもまでに親しまれた遊びである。北京の気候条件によって冬至から什刹海や中海が凍り、天然のスケート場になった。皇室や貴族が豪華に飾られたそりに乗って遊んだり、庶民が簡易そりに乗って遊んだり、1人スケートなどをしていた(33)。

鼓詞は、太鼓のリズムに合わせ小説の内容を語る講唱文学の一種のことである。清代は文学が盛んな時代であり、多くの文学作品が創り出された。鼓詞の創始者は貴族であり、後に鼓詞の内容を書くことに励む士大夫たちが輩出した。しかし、鼓詞は上流階層の間での人気が長く続かず、短い間に消えてしまった。一方、庶民の間では人気があったようである。無職の人が生活の為に、路地で軍鼓を持ち小説の内容を語り、その声が聞こえると、わざわざ聴きに来る人々の中に、家族連れの人や、遊女がいた。鼓詞の演奏は季節も場所も問わず、日常的な娯楽であると考えられる(34)。

雑技と八角鼓劇(八角形のタンバリンと三弦・胡琴・琵琶・打琴・太鼓など伴奏楽器として歌い語り演ずる通俗劇)を合わせて雑耍と言われた曲芸が清代に形成された。つまり、こま回し、鼠回し、猿回し、吞刀吐火、綱渡り等の雑技と楽器を用いて歌い語る劇が庶民の娯楽であり、それは旧正月や元宵節(旧正月から数えて15日目、最初の満月の日で、正月の締め括りの日である)に天橋付近で観ることができ、また廟会(祭り)が行われた時も観ることができた(35)。

太古の人々は歌と踊りで収穫を祝い、神霊への感謝を表した。時の流れに従い、中国の北方では田植えの時に踊られる秧歌が現れた。農村で行われていた秧歌は地方劇の一種として京師に伝わり、旧正月や廟会の時に、鮮やかな衣装を身にまとい、高足(竹馬)を履いて秧歌を歌い踊られた。

跑旱船とは、竹で船の形を作り、その周りに布を貼り縫い、船の絵を描き、本物の船のように仕上げ、男性でも女性でも派手な衣装を着て、女性が船を持ち乗っているように揺らしながら歌を歌ったり踊りを踊ったりする。一方、男性が板を持ち、女性に合わせて船を漕ぐフリをしながら、歌を歌う伝統舞踊である。秧歌と同じように跑旱船も旧正月や廟会の時にしか観ることができない(36)。

子どもの遊びには、けまり、竹馬、兎兎爺、こま回し、高櫃があった。

けまりは鷲や鶏の羽を銅銭に詰め込んだもので、伝統的な玩具の1つである。遊び方は至って簡単である。けまりを足で蹴り上げ続け、何回連続して蹴り続ける事ができるかを競う。1人でも多数でも遊ぶことができ、基本的に庭や空き地で遊ぶことが多かったようである(37)。

竹馬は漢代から受け継がれたものであり、日本の竹馬の形や遊び方と異なる。1本の竹に両足を乗せ跳ねながら前進する遊びであるが、バランス感覚が鍛えられる遊びであり、戸外での遊びであった(38)。

兎兎爺は古くから月の神様とイメージされ、中秋節(旧暦8月15日)に祭られるものであったが、清代から初めて子どもの玩具となった。泥で固められ、武士や商売人をモデルにして作られた玩具が多くあるが、兎兎爺(うさぎ)の玩具が一番人気を集めた(39)。

こま回しも日本のこま回しとは形や遊び方が異なり、古くから玩具として子どもに親しまれていた。大人から子ども達に贈られるプレゼントの定番でもあった。砂時計の形をしているこまを紐で転がし、1人でも楽しめることができるし、友達同士でルールを決め競うこともできた(40)。

高櫃と言われるものは日本の竹馬と同じものである。子どもが馬に乗っている大人のマネをして、竹に跨って走り回っていたことから始まった遊びである。平安時代に日本にも伝わったと言われている(41)。

天橋には当時、庶民の娯楽のすべてが揃っていた。芝居小屋や劇場、茶館、露天の市、酒楼などが数多く建てられ、芸人がいて、遊女がいて、乞食がいて、遊興の客がいた。京劇や相声、奇術、曲芸、大道芸など様々な芸が演じられ、天橋八怪と呼ばれる芸人集団が現れた。彼らが天橋で色々な芸を披露していて、天橋を賑わしていたこともあるので、天橋は庶民の娯楽の場所となっていた(42)。

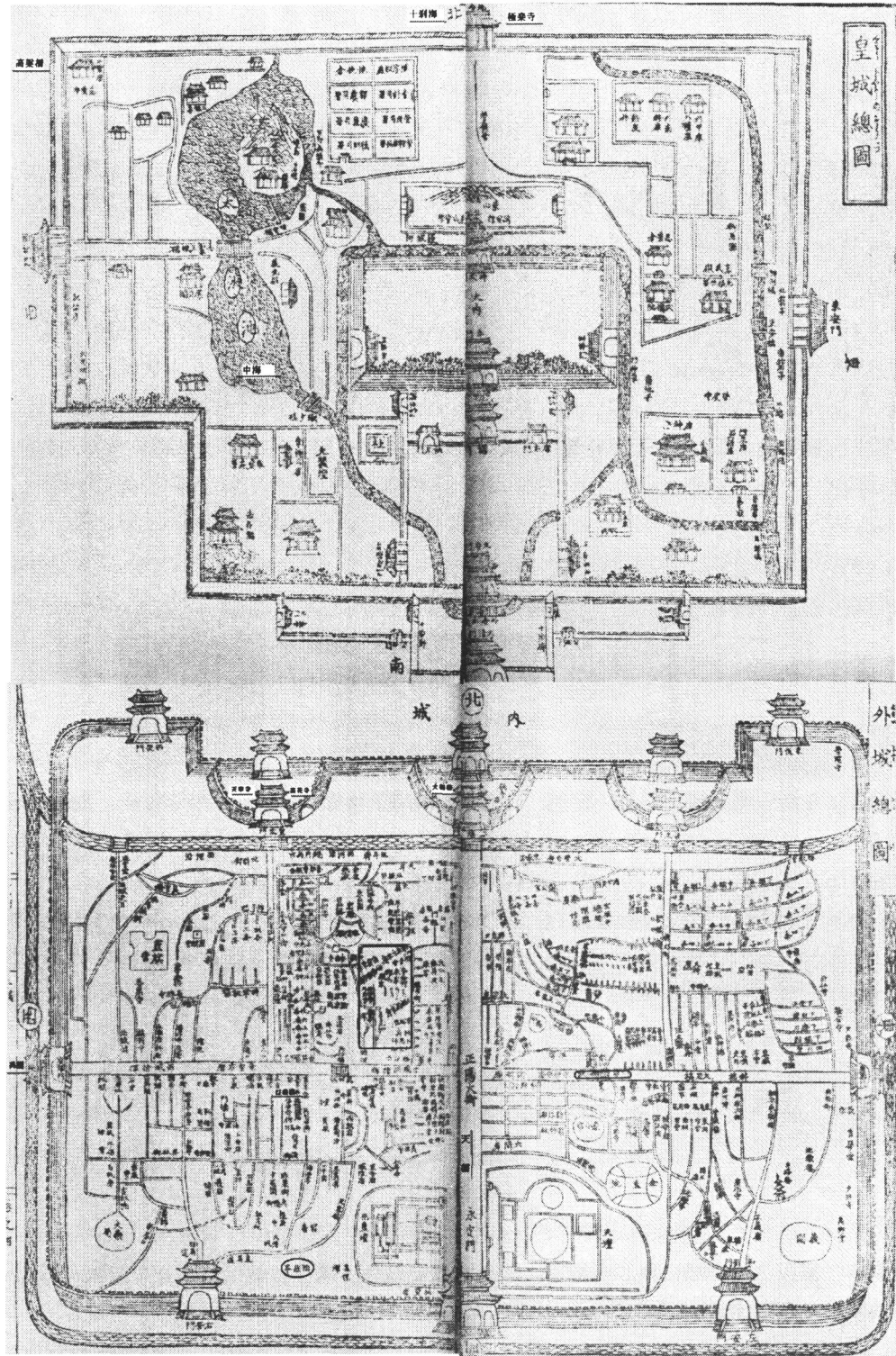


图2 清代の北京城（出典：『唐土名勝図会』）



図3 觀賞鳥。(出典：于潤琦著『老北京的玩藝兒』中國文聯出版社、2006年)

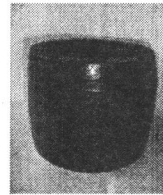
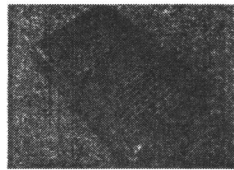
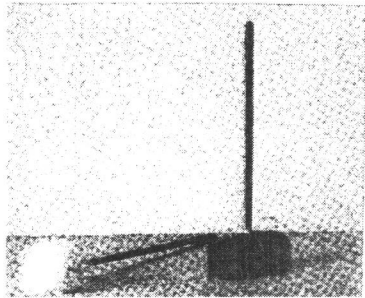


図4 左から泥過籠、關盆、養盆。(出典：瀨川千秋著『關蟋』大修館書店、2002年)



図5 画面左は關蟋に興じる男達。画面右は記錄係。勝負の結果や賭金を記帳する。(出典：前掲『關蟋』)

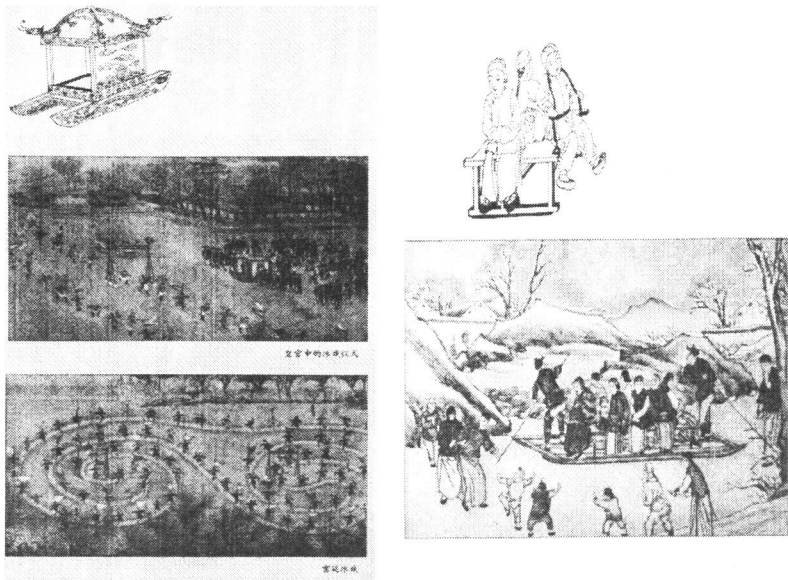


図6 画面左上は、スケートしている皇帝や貴族達。右上はそりをして楽しんでいる庶民や子供達。下の真ん中は庶民がスケートをしている絵である。(出典：『中国節』)

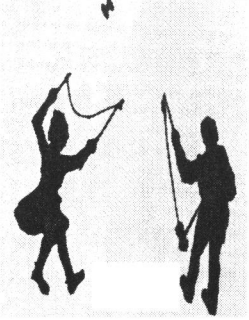


図7 こま回し
(出典：『老北京的玩艺儿』)

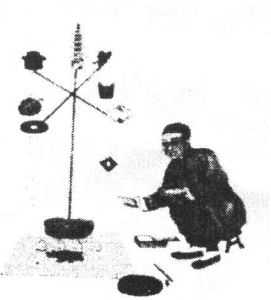


図8 鼠回し
(出典：『老北京的玩艺儿』)



図9 けまり（出典：『老北京的玩艺儿』）

おわりに

1153年金の国から1911年清末までの北京を年代、階層毎に娯楽の種類を述べてきた。金の女真族、元のモンゴル族、明の漢民族、清の満州族（祖先は女真族）は皆北京を首都とした。比較すると、少数民族が北京を都とした時間は、漢民族と比べて長く、その文化は、多くの民族の色彩が混入することになったのである。本稿はこれらの時代を通して、行われた娯楽を総合的に比較したことによって、いくつかのことを明らかにした。

金代と元代は遊牧民族が統治していた時代なので、軍事上や生活上の意味合いで皇族や貴族から一般庶民まで馬術や弓術が仕事、生産の一環として行われていた、時には狩猟することが皇族や貴族の娯楽であった。馬術や弓術に通じた「射柳」（金代の祭りで、馬に乗って弓を射る）が武術の訓練として行われた。元代の雑劇に刀や弓を使う武打劇がある。つまり、金代と元代では軍事が重要視されたことが見られる。明代では、軍隊の中で鉄砲や火槍が用いられるようになり、弓術や馬術が金、元の前の時代より地位が下がった。また、明代は漢民族が統治していたこともあり、馬術や弓術より剣術や拳術や棍術が盛んであった。清の初期においては、満州族は馬術と弓術に精通した伝統を保有したが、清の中期になると、北方の脅威がなくなり、軍事的な意味合いで狩猟をすることが少なくなり、皇族や貴族の間で弓術がスポーツや娯楽の1つとなった。屋敷内で射撃の場所を儲け、友達を誘って互いの弓術の腕を見せ合い、時にはお金を賭けることもあった。賭博が禁じられた時でも射撃にお金を賭けることは違法ではないと認められていた。

劇に関しては、金代の女真族は歌と踊りが優れている民族であり、かれらは宋代の「宋雑劇」に基づき、「院本」と言われる演劇を創った。演劇は宮廷や普通の茶楼でも上演されたことから、当時演劇を観ることは皇族から庶民まで全階層的な娯楽であったと考えられる。元代、「院本」と「諸宮調」（恋愛物の小説と軍記物の講史に分けられ、日本の落語に似たものである）に基づいて民衆の新しい歌劇「元曲」が生まれた。元曲の役者は教坊に属した楽人がいて、宮廷や官庁で上演したり、貴族や官僚のお召しを受けたり、民間の招きを受けたりして、元曲を皇族から庶民まで観ることができ、全階層の人々を楽しませた。蘇州の崑山から始まった「崑腔」が魏良輔によって改革され、明代万暦年間（16世紀末～17世紀初）到北京に伝わり、清代康熙年間まで長い期間に盛んであった。崑劇は格調高い芝居として皇族や貴族や知識人・文化人に愛好された。宮廷や戯楼で崑劇が上演された。しかし、崑腔の歌詞内容は貴族の思想に合うが、大衆に合わないため、清の中期から民間

で乱弾という新腔が流行りだした。1790年、乾隆帝の80歳の祝賀の時に、安徽省の劇団と湖北省の劇団を合流した。かれらは安徽と湖北の地方劇を核とし、崑劇や梆子腔や秦腔などの地方劇を吸収しつつ、京劇を創り上げた。京劇はあらゆる地方劇のよい所を吸収したので、京劇は崑劇より通俗的で娯楽性に富む演劇であると言われ、皇族から庶民まで親しまれた。劇に出る役者は元々身分の低いものであったが、京劇が貴族に人気が出たため、貴族は自らノーギャラもしくはお金を払って舞台に上がって演じるようになった。京劇を上演する場所を梨園と言ひ、大柵欄や肉市辺りに梨園が集中している。肉市と大柵欄は外城に位置しているが、内城にも近いので、皇族や貴族も行きやすい場所であった。しかし、清朝末期、政治的基盤が揺らぎ始め、内乱と連合軍の北京占領によって、京劇などの芝居上演が禁じられた。京劇の興起と戦乱が相次いだことで、崑劇の姿が消えていった。

賭博について、金代では茶楼で双六をする風習があった。元代の資料は少ないため、それに関する記録は見られないが、明代になると、上流階層から庶民に至まで賭博が盛んであった。上流階層では、鬪鷄と鬪蟋に賭けたお金と注いだ熱意は言葉では表せないほどすごいものであった。鬪蟋は上流階層だけではなく、一般庶民も熱中した大衆的な娯楽であった。宮廷内でも街角でも茶楼でもあらゆる所で蟋蟀を鬪わせる風景が見られた。唐代から始まった鬪蟋は時代とともに、盛んになってゆき明代は鬪蟋ブームと言っても過言ではない。明朝の遺風をついで清代でも鬪蟋が盛んに行われていた。乾隆帝と西太后は有名な蟋蟀好きであった。鬪蟋は唐代から人気が出たので、それから多くの人々が途切れることなく虫の捕獲法や飼育法、戦わせ方を研究し、蟋蟀を飼育する道具を工夫してきたので、長い歴史を持っている遊びの1つである。しかし、初めは蟋蟀は声で楽しむ虫であったが、戦わせるようになってから、蟋蟀を飼う人は虫好きではなくなり賭博が目的である人が殆どであった。

『元氏掖庭記』に元代では皇族や貴族が宮廷の中で宴をすることが少なく、花見をしながら宴をする風習があったと述べている。旬の花によって宴の名前も付けられ遊び心が感じられる。清代になると、極楽寺や棗花寺や什刹海などで花博がよく開催された。それぞれの場所は内城に位置し、貴族や知識人・文化人が訪れることが多かった。外城に位置している莊園や三里河辺りも花園があるが、それも貴族達が見る場所であった。季節に応じて花見をすることが上流階層の娯楽であった。しかし、9月9日（重陽節）に菊を観ることが風習となっていて、貴族だけではなく庶民も子どもも一家揃って菊を観るのが1年中の1つのイベントであった。

八大胡同は外城に分布しており、陝西巷・石頭胡同・韓家潭・百順胡同・皮條營・王廣福斜街の胡同だけを指しているわけではなくこの辺一帯を総称して八大胡同と呼ばれていた。明・清時代には遊郭が集まっている場所として有名になった。一流の遊郭があったのは、百順胡同、因脂胡同、韓家潭、陝西巷であると言われていた。遊郭の遊女は”南班”と”北班”にわけられ、”南班”とは江南地方一帯の女性を指し彼女らには非常に教養があった。その為一、二流ランクの遊郭には”南班”の女性が多く、そこは主に官僚や文化

人などの接待に使われたり、遊郭の役割以外に、お茶を飲みながら京劇などについて語り合ったりする文化的サロンのような役割ももっていた。”北班”は黄河以北の女性を指し、容姿は非常に美しいが、教養にかけていたので、三、四流ランクの遊郭に多かった。官僚が遊女にはまり、職務を怠ることや公金を横領するまでに遊女にお金を費やした人もいたので、1891年に遊郭禁止令が出された。一見官僚たちの女遊びの風習が抑えられたように見えるが、宴の席に遊女の代わりに男稚児芸者が一緒に飲む役になっていた。この男稚児芸者のことは明代では小唱と呼ばれていた。明代や清代に、男色にはまる官僚や知識文化人が次第に増えていた。清末まで遊女や男稚児芸者を含む遊郭を取り締まる命令が何回も出されたが、禁止令が出される度に、遊郭が一時的に閉るが、暫くすると店がまた開き、このような繰り返しであった。遊郭は八大胡同に集中した理由は次の3つである。1つは、外城に位置しているが内城にも近いので、官僚が来やすい。2つは、この辺りは色々な店が集まり、全国からやってきた人々が行き来する繁華街である。3つは、この辺りに梨園や茶楼や飲み屋が集中しているので、食べる、遊ぶ街であった。

明代でも清代でも書画や骨董品の收藏が上流階層の娯楽の1つであった。アイススケートは明代においては庶民の娯楽であったが、清代になると、皇室や貴族は豪華に飾られたそりに乗ってアイススケートをするようになった。庶民は簡易そりに乗ったり、1人でスケートをしたりしており、アイススケートは清代では全階層の娯楽になっていた。スケート場は什刹海や中海において行われていたと確定することができる。

雑技の歴史は古く、周代（約紀元前 1050 年～紀元前 771 年）に芽生え、漢代（紀元前 206 年～220 年）に形成された。元以前では河南省の雑技が比較的影響力を持っていたが、元朝の成立後、首都が河南省開封から北京に移り、河北省呉橋の雑技が次第に栄え始め、その影響力はますます大きくなり、現在でも「雑技の里」として公認されている。明代から、多くの芸人が天橋付近で白い円を描いて自分の持ち場として、芸を披露して生活費を稼いでいた。清代では、明代の雑技に八角鼓劇を加えて雑耍と呼ぶものが明代とほぼ同じように天橋付近で芸を披露し、庶民を楽しませ、生活費を稼いでいた。

金・元・明には見られず清の時代から始まったと考えられる娯楽は、鳥を飼う習慣である。当時は王族や貴族が鳥と鳥籠の贅を競う高雅な趣味であった。鳥籠を持ち茶楼へ行ったり、散歩しに行ったりしていた。茶楼も鳥籠を掛ける場所を用意することは当たり前であった。

中国は昔から農耕の国であり、歴代の統治者は農業に対してとても関心を寄せていた。そして、秧歌（田植えの時に豊作を祈るための踊りである）や跑旱船（収穫を祝い、神霊への感謝を表すための踊りである）が創り出された。これらは漢民族の舞踊であるので、かなり昔から創られていたと考えられる。清の満州族は自分の文化を保持しつつ、漢民族の文化を融合した。清代において、正月は天橋付近で、祭りの時に各廟でそれらの舞踊が観ることができた。

子どもは想像力が豊かであり、遊びの天才である。冬に足の血流をよくするため、石蹴

りやけまりなどの遊びが考えられた。こま回し・けまり・竹馬・高跷は元々子どもの遊びであったが、大人もそれをやるようになり、更に技を磨き、それぞれのプロが生まれた。彼らは天橋付近で雑技の1種として人前で披露した。

清朝末期においては、内乱と戦争が続いて人々の生活が不安定になり、所属した軍隊が解散され居場所がなくなった人々が大勢いた。その中に芸名が「老毅軍」で、巧みな話術で、うまい演技で戦争の話を人に話したり、政治を批判したり、官憲に追い払われるような人がいた。彼のような珍しい芸を持っている人々は天橋付近で芸を披露した。従って、「天橋八怪」と呼ばれる職能集団が清末から徐々に形成された。

中国の歴史上において、遼の契丹族、金の女真族、元朝のモンゴル族、明朝の漢民族、清朝の満州族は北京を首都とした。少数民族が北京を都とした時間は、漢民族より長く、北京の文化や娯楽に多くの民族の色彩が混入していることが明らかになった。

本稿では、階層によって娯楽の内容を分類した。それぞれ行われた娯楽の場所を確定し、それらの特徴が見ることができたと考える。金、元、明、清まで北京で行われた娯楽を比較してきたが、1912年の辛亥革命によって中華民国が建立され、首都は南京に移したが、後に1949年中華人民共和国が成立され、再び中国の首都となった北京は清代で行われた娯楽をそのまま継承したのか、若しくは新たな娯楽が作られたのかを研究することがこれからのテーマであると考えられる。

註

- (1) 北魏時代の地理学者酈道元の『水経注』に書かれた(侯仁之「北京」陳橋驛『中国六大古都』中国青年出版社、1983年、所収19頁)。
- (2) 北京外城の西南部にある陶然亭付近で燕の国の遺物が発見されたことで証明された(註1前掲書20頁)。
- (3) 正式の都は上京臨少府である。当時、北京は契丹族が建てた遼国の管轄領域の南部に位置しているため、「南京」または「燕京」と名づけられた(註1前掲書24頁)。
- (4) 元の大都は金の中都に基づいて作られているのではなく、大都は全く新しい場所で新しく作られたものである(註1前掲書36頁)。
- (5) 明の時代において北京は2回再建された。1回目は1404年(永楽2年)から1420年(永楽18年)の間に再建された。元の大都が広すぎて防備しにくいために、永楽帝が軍事上の目的で北京城を縮小した。2回目は1564年(嘉靖43年)に再建工事が行われた。モンゴル族が北京郊外で数回北京城壁の破壊によって北京の安全が脅かされたために、北京城の南に壁を造った(註1前掲書46～50頁)。
- (6) 侯仁之「北京の沿革」31頁。
- (7) いま北京に残っている故宮や西郊の頤和園と円明園は、清朝の初期に再建または新築されたものである(註1前掲書56～61頁)。

- (8) 侯仁之『歴史的北京城』中国青年出版社、1962年、19頁。
- (9) 庶民の税金の一部としての米を全国から京師（北京）に運ぶためのルートである。
- (10) 侯仁之「北京」（陳橋驛『中国六大古都』中国青年出版社1983年）所収42頁。
- (11) 註（9）前掲書44～46頁。
- (12) 都市区画は漢代に里と呼ばれていたが、唐代には「坊」と呼ばれている。曾我部静雄『中国及び古代日本における郷村形態の変遷』（吉川弘文館、昭和38年）第五章第一節「都市里坊制の成立」によると、坊とは防、つまり「ふせぐ」の意味をもち、漢、晋の時代は宮城内に坊が設けられていたが、北魏になると、宮城外の普通の場所も坊が設けられた。そして隋から都市の区画は坊に一定した。100戸＝1里、5里＝1郷という行政上の郷里制が行われた。唐代になると里を坊と呼ぶようになった（佐藤武敏『長安』近藤出版社、1971年、153頁）。
- (13) 賀樹徳『北京通史』6巻、中国書店、1994年、58～90頁。
- (14) 八旗制度とは清の太祖が制定したものである。全軍を旗の色によって黄・藍・紅・白・鑲黄・鑲藍・鑲紅・鑲白の八軍に分け、各軍に兵7500人を配属した。後、太宗の時代に蒙古八旗・漢軍八旗が設けられ、政治、軍事、生産という3つの面の職能を持ち、満州族社会の根本的な制度となった（吳建雍『北京通史』7巻中国書店、1994年、12頁）。
- (15) 吳建雍『北京通史』7巻、中国書店、1994年、102～106頁。
- (16) 金元代に行われた演劇の一種。しぐさと台詞を中心に歌も歌う（斎豫生・夏于全『中国通史』第3巻、吉林摄影出版社、789頁）。
- (17) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989年、331頁所載の（宋）洪皓撰『松漠紀聞』。『松漠紀聞』は金国の事跡を記す書物である。
- (18) 註(17)前掲書331頁所載の（宋）宇文意撰『大金国志』。『大金国志』は40巻であり、金の太祖から哀宗迄、九主117年間の事跡を記す書物である。
- (19) 註(17)前掲書332頁所載の（元）陶宗儀撰『說蓑』全120巻の110巻『元氏掖庭記』から引用。『說蓑』は経書・諸史・隨筆・伝記の類数百種を収録している。
- (20) 元曲は1本4折（幕）で構成されている。代表的な作品は王実甫の『西廂記』である。その内容とは、貧書生の張君瑞は西廂に仮寓していた名門の娘崔鶯々と知り合い、崔が匪賊に包囲された時に崔の母親が張に助けてくれたら娘を嫁がせると言った。しかし、約束を果たさずに二人は逢う機会を重ね、母は張の進士及第を条件として結婚を認め、障害の克服後に大団円となる（斎豫生・夏于全『中国通史』第3巻、吉林摄影出版社、934～939頁）。
- (21) 註(17)前掲書333頁所載の（明）史玄撰『舊京遺事』。『舊京遺事』は明朝、朝廷の故実や、庶民の風俗、習慣を記録した書物である。
- (22) 註(17)前掲書333頁所載の（明）陸容撰『紉園雜記』。『紉園雜記』では、明代朝野の故實を述べ、間、諷刺鄙事を雑へ、小説の体裁をとる書物である。

- (23) 註(17)前掲書 334 頁所載の(明)刘侗、于奕正著『帝京景物畧』。『帝京景物畧』は北京の山、川、园林、廟、橋、年中行事などを記録した書物である。
- (24) 註(23)前掲書。
- (25) 註(23)前掲書。
- (26) 註(23)前掲書。
- (27) 註(23)前掲書。
- (28) 註(23)前掲書。
- (29) 註(17)前掲書 338 頁所載の(明)許浩著『復巒日記』。
- (30) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、349 頁所載の(清)震鈞著『天咫偶聞』。『天咫偶聞』については北京のことを記したもので、清末、外国軍隊の侵入などによって、北京の変貌して行くのを歎いて、北京の姿を伝えるために書かれたものである。
- (31) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、346 頁所載の(清)闕名撰『燕京雜記』から引用。『燕京雜記』では北京の年中行事が記録されている。
- (32) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、361 頁所載の『帝京歲時記勝箋補』。
- (33) 註(32)前掲書の 362 頁所載。
- (34) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、356 頁所載の(清)藝蘭生撰『側帽極談』
- (35) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、367 頁所載の(清)夏仁虎撰『舊京漱記』。『舊京漱記』は、作者が京師に居住している間の見聞を記録している書物である。
- (36) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、346 頁所載の(清)敦崇著『燕京歲時記』。『燕京歲時記』は、清末期の北京の歲時記を書き記されたものである。
- (37) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、364 頁所載の(清)敦崇著『燕京歲時記』から引用。『燕京歲時記』は、清末期の北京の歲時記を書き記されたものである。
- (38) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、366 頁所載の(清)丁立成撰『王風箋題』。
- (39) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、365~366 頁所載の『舊京風俗志』。
- (40) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、364 頁所載の(清)闕名撰『燕京雜記』。『燕京雜記』では北京の年中行事が記録されている。
- (41) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、369 頁所載の(清)魏元決撰『都門瑣記』。
- (42) 吳廷燮『北京市誌稿』北京燕山出版社、1989 年、371~372 頁所載の湯用彬纂『舊都文物略』。